

明治の大修理

さて、明治三十年頃になると、今度は本当に城の傾きが目立ち始めました。この惨状を見た松本中学校校長の小林有也（うなり）は、「松本城天守閣保存会」を組織して、松本城の保存に努めました。小林校長の働きによって、明治三十六年（一九〇三）より大正二年（一九一三）にかけて大修理が行われますが、これは大天守に縄を掛けて引き起こしたという少し乱暴なものでした。城の北東に位置していた裁判所前に力点を置いて縄で引っ張りましたが、天守が折れそうになったので、一分だけ傾いた状態で中止したと、『図説国宝松本城』（中川治雄、一草舎出版、二〇〇五）にはあります。このとき小林校長は、「肉眼ではこれで真っ直ぐだから、これでよしとしましょう。義民加助の怨霊も好記念

ですから」と言われたそうで、この頃には既に嘉助の物語が広まっていたようです。

修理竣工後の大正五年九月から東京朝日新聞に連載された小説家半井桃水（なからいとうすい）の『義民嘉助』では、嘉助が処刑される直前に地震が起り、『天守は西に傾いた、水野の運も傾いた、嘉助が魂魄の死なぬ証拠じゃ』という怨みのセリフで、はっきり城が傾いたと書かれています。このように明らかに城が傾いた後の作品では、前記二作とは異なり、その表現も確たるものに変わったことが分かります。



松本城保存功労者（小林有也、市川量像）の碑（松本城内）